

石狩文芸同交会創立45周年記念講演会

「暮れ残った」のは何か

〜芥川龍之介の絶筆をめぐる〜

松王かをり

◇はじめに

※講演の目的

芥川龍之介の最後の旅は、北海道であった。自死する
わずか二か月前のこの講演旅行が、いったいどのような
ものだったのか、それを芥川はどのように感じていたの
だろうか。

その後、帰京した芥川は、書きかけの作品を次々に脱
稿して、いよいよ「死」へのカウントダウンを始める。
そして、昭和2年7月24日、

「水涕や鼻の先だけ暮れ残る」

を短冊に書いて自死する。満35歳であった。果たして、
芥川は、この絶筆にどのような思いを込めたのだろうか。
それを、考察してみたい。

◇第1部 最後の講演旅行（東北・北海道）

(1) 講演旅行のあらまし

(2) 芥川の所感

(3) 道内の反応

(4) 講演旅行の成果

◇第2部 絶筆をめぐって

【謎 その1】辞世の句か？

【謎 その2】「水涕」とは？

【謎 その3】「暮れ残」ったものは？

◇おわりに

◆1 東北・北海道講演旅行の行程

(昭和2年5月13日～25日)

- 13日(金) 22時30分・上野発。里見弾とともに乗車。車中泊。
- 14日(土) 7時20分・仙台着。仙台市公会堂で講演。仙台泊。
- 15日(日) 盛岡着。盛岡劇場で講演(「夏目先生のこと」)。
- 盛岡泊。
- 16日(月) 11時42分・盛岡発。22時・函館着。函館泊。
- 17日(火) 函館市公会堂で講演(「雑感」)。23時06分・函館発。
- 車中泊。
- 18日(水) 7時54分・札幌着。北海道大学で講演(「ポオの美学
について」)。大通小学校で講演(「夏目先生の事ど
も」)。札幌泊。
- 19日(木) 8時00分・札幌発。11時32分・旭川着。錦座で講演
(「表現」)。18時15分・旭川発。21時44分・札幌着。
- 札幌泊。
- 20日(金) 小樽着。花園小学校で講演(「描かれたもの」)。22時
48分・小樽発。車中泊。
- 21日(土) 7時00分・函館着。12時30分・青森着。帰京する里見
弾と別れ、青森市公会堂で講演(「漱石先生の
話」)。青森泊。
- 22日(日) 北陸回りで新潟へ。夜、新潟着。ここからはプライベ
ートな旅となり、23日(月)は新潟で過(こ)し、24日
(火)夕方、帰京の途に就く。
- 25日(水) 田端の自宅に戻る。

◆ 8 芥川文(述)・中野妙子(記)『追憶 芥川龍之介』(昭50・2、筑摩書房)

主人はなくなる前年の、大正十五年の夏、鶴沼くづぬまにいました私達の家へ、長崎から渡辺庫輔くすけさん呼びました。／主人は今まで作りましたたくさん俳句を整理して、その中から七十七句を抜き出して、渡辺さんに清書してもらいました。／きつと思うところがあつて、清書してもらったのだと思います。／主人が亡くなりましてから、この句集を印刷にしまして、それと日頃使用しておりました印のいくつかを擦したものとを、二冊にして、横十三・五センチ、縦二十七センチの和紙に収め、和綴にして、藍色木綿の表紙の三つ折の折たたみの中に収めて、『澄江堂句集 印譜附』としてお返し用に、それぞれお送りいたしました。

◆ 9 山本健吉『定本 現代俳句』(平10・4、角川選書、角川新書版『現代俳句 上巻』昭26・6)

七月二十四日の午前一時か二時ごろ、彼は伯母の枕もとへ来て、一枚の短冊を渡して言った。「伯母さん、これをあしたの朝下島さんに渡してください。先生が来た時、僕がまだ寝ているかもしれないが、寝ていたら僕を起こさずにおいて、そのまままだねているからと言ってわたしてください」。これが彼の最後の言葉となった。「下島さん」とは主治医下島勲であり、乞食俳人井月せいづきを世に紹介した人である。この後、彼はヴェロナールとジャールの致死量を仰いで寝たのである。短冊には「自嘲」と前書してこの句が書かれてあつた。

◆ 10 『澄江堂句集』(全七十七句)

16句目 桐の葉は枝の向き向き枯れにけり

(『餓鬼全句』大9・11)

17句目 水涕や鼻の先だけ暮れ残る

18句目 元日や手を洗ひをる夕ごころ

(『芥川龍之介俳句集』大正十年)

◆ 11 中村草田男「俳人としての芥川龍之介」(昭17・7、『芥川龍之介研究』初出)

私はこの句こそ、彼自らによつて客観化された人間芥川龍之介の一個見事な自画像であると思う。二階の窓ぢかい手欄に寄りかかったひとり人の横顔が、都会の屋根の彼方に日の没し去った後の、真黄色な残光の光を背景にして、くつきりとシルエットになつて浮かびあがっている。次第に増す寒さは夜気となつて迫ってくるが、室内は灯もともらず、窓辺の人は不動の儘である。隆たかねい鼻の先に唯一点、生き物のように宿っている氷凍だけが、遠くからの黄色い残光を透して、いよいよ瞭然はつきりと存在をきわだたせている。／芥川龍之介には、比較的初期の作品に、既に次のような題名を附せられたものがあつたことを思い出さずには居られない。／「孤独地獄」

芥川龍之介50句

『俳句 αあるふあ』(一九九七・一〇、一一月号、毎日新聞社)のアンソロジーより

*印は、『澄江堂句集』に採択された句(発表者がつける)



龍之介の河童の絵

1 落葉焚いて葉守りの神を見し夜かな (明34)

落葉の季節になった。掃き寄せた落葉を焚いた炎の中に、葉守の神が見えたような気がした。もうすぐ、寒い冬がやってくる……。

2 明眸の見るもの沖の遠火花 (大5)

美しい女性が、海上はるかに揚がる火花を見上げていた。なんとという明眸であろう。その立姿も、火花を背景にすると一段と美しい。

*3 蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな (大7)

蝶が止まっている。その丸い舌の形を見ていると、機械のゼンマイに似ているようで、実に面白い。あたりは酷暑でむしかえっている。

4 労咳の頬美しや冬帽子 (大7)

帽子をかむった女性。その女性は結核で痩せている。が、美人薄命といわれているように頬は美しく、ひとさわ目をひいている。

*5 木がらしや東京の日のありどころ (大7)

吹き荒ぶ木がらしの日。この東京のド真ん中に身を置いている自分は、なんとなく身の置きどころもなく、木枯らしを身にうけている。

6 胸中の風咳となりにけり (大7)

三汀の病を問ふ。我亦時に病床にあり

教師をやめる

7 帰らなんいぎ草の庵は春の風 (大8)

横須賀の海軍機関学校教官をやめる決心をした。陶淵明の「帰去来之辞」がきっかけで、東京に帰り、「大阪毎日」に入社しようと思つた。

8 青蛙おのれもペンキぬりたてか (大8)

つやつやした肌を持った青蛙が一匹、葉の表に止まっている。あれ、おまえもペンキ塗りたてなのか。思わずそつ声をかけてしまった。

*9 木がらしや目刺にのこる海のいろ (大8)

ごく普通の食卓に載っている目刺し。厳しい木枯しを受けてきたこの目刺を見ると、その目には、まだ、海の色が残っている……。

10 拾得は焚き寒山は掃く落葉 (大8)

森鷗外の「寒山拾得」が「新小説」に載ったのは三年前の一月。また、落葉の季節になった。落葉に集う二人に寒山拾得を思う。

11 埋火の仄に赤しわが心 (大8)

埋火をおこすと、まだほのかな赤い炭が燃え立つ。その、ほのかな火の色は、私の心の中に忘れていた、ほんのりとした恋心のようにだ。

*12 水漬や鼻の先だけ暮れ残る (大8)

寒い。しきりに出る水っぱな。心身が不安定で、何故か鼻が意識され、夕暮れの日を受けて、その鼻先だけが暮れ残っている感した。

13 雨に暮るる軒端の糸瓜ありやなし (大9)

子規の絶筆は「痰一斗糸瓜の水も間に合はず」。きょうは九月十九日、子規忌である。その子規の糸瓜は、きょうも根岸にあるだろうか。

14 井月の瓢は何処へ暮の秋 (大9)

もと長岡藩の武士・井上井月(きんづき)は十二歳でふるさとを捨て、三十二歳で伊那谷に住みついた。腰に酒の入った瓢箪を下げて死ぬまで放浪した。

*15 桐の葉は枝の向き向き枯れにけり (大9)

桐の葉の枯れが目立つこのころである。桐の大きな葉は、よく見るとそれぞれの方向があつて、それで微妙に枯れ具合がちがう……。

*16 元日や手を洗ひをる夕ごころ (大10)

新年は、年頭の諸々の行事をすませると、あつという間に一日が終わってしまふ。穏やかな一日が過ぎて、手を洗つて部屋に入る。

17 市中の穂麦も赤み行春ぞ (大10)

中国旅行。上海に上陸し、杭州西湖・蘇州・揚州・南京を見て、蕪湖・蘆山・洞庭湖・漢口などを廻った。いまは麦秋の候である。

*18 麦ほこりかかると童子の眠りかな (大10)

「大阪毎日」の海外特派員として中国旅行に出た。炎天下を麦ほこりを上げて走る馬車とその上で眠る子。そんな風景がどこにもあつた。

19 楓橋の夜泊に響くきぬた哉 (大10)

「楓橋の夜泊」は、中国の詩人・張継の有名な詩「楓橋夜泊」である。「月落子烏啼いて霜天に満つ」。その寒山寺を訪れた作。

*20 あかつきや蝉なきやむ屋根のうら (大10)

このころ神経が甚しく傷つき、催眠剤なしには一睡もできぬようになってしまった。今夜も、明け方までコオロギの声をきいた。

21 月の夜の落栗拾ひ尽しけり (大10)

伊那谷下島空谷の家には、幼いころを食併人・井上井月が訪ねてきて、空谷はそれを見たという。井月に「落栗の座を定めたる窪溜の」。

22 ゆららかや杉菜の中に日は落つれ (大11)

真っ赤に燃えて、ゆったりと落ちてゆく夕日。その日が野原一面に生えている青い杉菜の真ん中に、これまたゆらゆらりと沈んでゆく。

23 花散るや牛の額の土ぼこり (大11)

四月中の雨の日にけなわねられている祭の牛車を見た。花を受けた黒い牛の額には、うっすらと土ぼこりがたまっていた。

24 竹の芽も蒔きたる彼岸かな (大11)

竹の葉が、新しいういいうい芽を出しはじめた。そこに夕方の日がさしこんでいる。庭には、もう彼岸がそこまできていたのだ。

25 たかんなの皮の流るるうららかな (大11)

鴨川をながめてみると、上流で節でも流っているのだから。たかんなの皮が一枚、また一枚と流れてきた。春のうららかな風だ。

26 萱草も咲いたばつてん別れかな (大11)

長崎の遊廓の美妓照菊。その妓とつき合って何年になるか。夏に萱草が咲いたら別れようといってきた。もうそろそろ別れねば……。

27 川狩や陶淵明も尻からげ (大11)

政治的野心をすてて田園に隠遁した宋の詩人・陶淵明にならって、自分も尻をからけて売文糊口の生活を送る。今日このごろである。

28 初霜や藪に隣れる住み心 (大11)

このごろ神経の疲労が著しく、筆をとる気もおきない。初霜が降りて、もう冬もきびしさを増す。隣の竹藪がゆれて一層神経にさわる。

29 薄綿はのびし兼ねたる霜夜かな (大11)

霜が降りて寒い夜がやってきた。伯母が、もめん綿の上に薄く真綿を引きのびしているが「これかなかなかむすかしい」という……。

30 時雨るるや犬の来てねる炭俵 (大11)

時雨の中を野犬がぬれてやってきた。近くの小屋にあった炭俵の上に、身をひきよせるようにして寝落ちた。寒い夜の風景である。

31 菜の花は雨によこれぬ育ちかな (大11)

菜の花がいちめんに咲き乱れている。まだ雨によこれていないその花は、明るくのびのびとしていて、いかにも育ちのよさが出ている。

32 かへり見る頬の肥りよ杏いろ (大11)

久しぶりに姉に会った。ふくよかな頬にはほんのりと赤みがさし、まるで熟れた杏そのものの娘になっていた。

33 松風をうつつに聞くよ夏帽子 (大11)

関東大震災後の増上寺。芝山内を過ぎ、万株の長松の並木を見ている。松風の音が聞こえてくるがそれは夢がうつつか、暑い夏のこと。

34 蒲の穂はなびきそめつつ蓮の花 (大11)

瀧井孝作を訪問しての帰り道、手賀沼あたりを歩いた。細長い茎の穂蒲がなびきはじめたかと思うと、蓮の花がその間にみえた。

35 初秋の蝗つかめば柔かき (大11)

このころは、つねに写生を心掛けている。つい先日蝗に出会った。戯れに掌に蝗をつかんでみると、思いのほかやわらかかった。

36 草の家に柿十一のゆたかさよ (大11)

下島空谷医師から、伊那の柿が贈られてきた。柿は好物。十一個入っていて、十一月と合わせ「柿十一」としてみた。

37 甘栗をむけばうれしき雪夜かな (大12)

古瓦こと小島政一郎が結婚した。甘栗をむく若い二人の姿も、うらやましいほどの睡まじさである。こちらの方まで嬉しくなってくる。

38 元日や啓吉も世に古筆筒 (大13)

菊池寛の自伝小説「啓吉物語」に「啓吉」という本を出すという。そのお祝いに一句。

39 乳垂るる妻となりつも草の餅 (大13)

室生犀星にお世話になり、さうそうになった妻の草餅は、ことのほかおいしかった。垂乳根の母ならぬ妻、ありがとうよ。

40 春雨の中に雪おく甲斐の山 (大13)

春の木々が芽吹いている。春雨がその芽を打ち、雪もいっそうふくらんでくる。遠景の甲斐の山々には、まだ名残りの雪が見える。

41 つくばひの藻もふるさとの暑さかな (大13)

昨年、犀星よりつくばひをもらった。関東大震災に会い、金沢に引き揚げた犀星のおきみやけになった、思い出多きつくばひである。

42 秋風や甲羅をあます膳の蟹 (大13)

犀星より、金沢の蟹が贈られてきた。さっそく茹でて食膳に載せる。赤い蟹の甲羅は膳をはみでるほど大きい。秋風が渡ってゆく。

43 たんたんの咳を出したる夜寒かな (大13)

お手伝いの女の子もいず、寝も眠り、ひとり机に向かってしていると、赤ん坊が咳をしているのが響いてきた。夜はいっそう冷えてきた。

44 初午の祠ともりぬ雨の中 (大14)

さようは初午。久保田万太郎の句会に出掛ける。途中で、初午の赤い旗が立っている祠があった。雨の中で、その旗も祠もめれていた。

45 更けまきさる火かげやよひ雑の顔 (大15)

昵懇の下島空谷医師の養女行枝が肺炎で急逝した。その部屋には時節柄雑人形が飾られていて、雑の顔がおぼつかなく浮いている。

46 兎も片耳垂るる大暑かな (大15)

本当に暑い一日であった。あまりの暑さのためであるが、兎も、その片耳が折れてしまいい、片方が垂れ下がっているようである。

47 かひもなき眠り葉や夜半の冬 (大16)

いま、鶴沼に養生にきている。空谷医師より薬をもらって効きめなく眠れない。うとうとすると、もう夜明けで、しらじらと明けける。

48 臘梅や雪うち透かす枝のたけ (大16)

新しい僕の家の庭には、樺・木斛、かくれみの、臘梅、ハツ手、五葉の松などがあつた。その中でも僕が特に好きなのは、一本の臘梅。

49 松風や白犬細うすぎにけり (大16)

松林の中を散歩する。白い犬が一匹、尾を振りながら通りすぎていった。犬は、曲がり角にきて、にやりと笑いを消えた。

50 尿する茶壺も寒し枕上 (大17)

すっかり精神も肉体も困憊しきっている。もう極限のところまできている。渡瓶がわりに用いている茶壺に、尿の音が淋しくひびく。

